

曹植における「惟漢行」制作の動機

柳川 順子

Motivation for Cao Zhi (曹植) to write *Wei han xing* (惟漢行)

Junko YANAGAWA

はじめに

三国魏を代表する文人曹植（192–232）に、「惟漢行」と題する楽府詩がある。この作品は、その楽府題が示すとおり、彼の父曹操（155–220）の楽府詩「薤露・惟漢二十二世」を踏まえる歌辞である。曹操のこの作品は、古歌曲「薤露」に、「惟漢二十二世」という句に始まる新たな歌辞をかぶせたものであるが、曹植の「惟漢行」は、この曹操の楽府詩の第一句にいう「惟漢」をその楽府題に掲げ、本作品が、曹操の新歌辞「薤露」に連なる楽府詩であることを明言しているのである。他方、曹植には別に「薤露行」と題する楽府詩もある。これもまた、その楽府題から見て、前掲の曹操「薤露・惟漢二十二世」とつながりを持っていることは確実と言ってよいだろう。そして、両詩の成立時期について言えば、後ほど詳述するように、「薤露行」が「惟漢行」よりも先んずると判断できる。

では、曹植はなぜ二度までも、父曹操の「薤露」に連なる作品を作ったのだろうか。そもそも、楽府詩は楽曲に載せる歌辞であり、その楽曲を示すのが楽府題なのだから、一般的には、ひとつの楽府題に対して複数の歌辞が存在することは決して珍しくはない。だが、曹操の「薤露・惟漢二十二世」は、魏王朝の成立後、王朝にとっては特別な宮廷歌曲群「相和」十七曲（『宋書』樂志三）の一曲となった作品である。そうした歌曲であるがゆえに、同時代の他の文人は誰も、「薤露」の新歌辞制作に手を染めたりはしていない。ところが、曹植はすでに「薤露行」がある上に、更に重ねて「惟漢行」を作った。これは、当時としては異例の行為であったと言わざるを得ない。曹植はなぜ、このような行為に出たのだろうか。そこにはきっと、何かよほどの思いがあったに違いない。では、その曹植の思いとはいったい何か。

そこで、本稿ではまず、曹植「惟漢行」を精読して、その主題を明らかにしたい。彼は何のために何を言おうとしてこの作品を作ったのか。加えて、この問題を考察するためには、本詩の成立時期を明らかにしないわけにはいかないだろう。ただ、本稿で考究したいのは、曹植における「惟漢行」制作の意図ばかりではない。本作品の場合、その主題のもうひとつ奥に、それを作った動機が隠れている。そして、それを探る糸口は、本歌辞を乗せる楽曲にあると予測される。彼は、「惟漢行」に詠じたような内容を、曹操「薤露・惟漢二十二世」を踏襲する楽府詩という器に盛ったが、これはなぜか、その内的必然性を探りたい。その際、重要な示唆を与えてくれそうな

のが、曹植のもうひとつの「薤露」歌辞、すなわち「薤露行」である。

こうした問題意識は、文学史の大局には関わらない、極めて微細な問いであるのかもしれない。だが、本稿で中心的に取り上げる「惟漢行」は、曹植という当代第一級の文人の全体像を明らかにする上で、欠くことのできない切片を私たちに示してくれるものだと確信する。また、曹魏王室の至親諸王に対する待遇については、歴史学の分野ですでに相当な検討が重ねられているように看取されるが¹⁾、そうした議論に対しても、本稿は文学研究という立場から、ひとつの考察材料を提供することができるかもしれない。

一 曹植「惟漢行」の主題とその成立時期

曹植の「惟漢行」は、これまで研究対象としてはほとんど顧みられることのなかった作品である。それは、一般に思い描かれる彼の人物像や作品像から外れる内容を持つからであるかもしれない。曹植は、魏王室の一員でありながら冷遇され続けた悲劇的文人というイメージが強いが、この楽府詩には、そうした自己不遇感は片鱗も認められないのである。加えて、この作品の趣旨が把握しづらいということもあるだろう。ひとつひとつの言葉の意味は捉えられても、それらが組み合わさって描き出すものが明確な像を結ばないのである。このことは、作者がどのようなつもりでこの楽府詩を詠じたのが未詳であることと関わっているだろう。そんな作品と向き合うに当たって、まずその全文²⁾を、訓み下し・通釈³⁾とともに示しておきたい。

太極定二儀	太極 二儀を定め、
清濁始以形	清濁 始めて以て形る。
三光照八極	三光 八極を照らし、
天道甚著明	天道 甚だ著明なり。」
為人立君長	人の為に君長を立て、
欲以遂其生	以て其の生を遂げしめんと欲す。
行仁章以瑞	仁を行はば 章らむるに瑞を以てし、
变故誠驕盈	变故は 驕盈を誠むるなり。」
神高而聽卑	神は高くして卑きに聴き、
報若響応声	報ずること響きの声に応ずるが若し。
明主敬細微	明主は細微を敬ひ、
三季嘗天經	三季は天經に嘗し。」
二皇称至化	二皇は至化を称せられ、
盛哉唐虞庭	盛んなる哉 唐・虞の庭は。
禹湯継厥徳	禹・湯は厥の徳を継ぎ、
周亦致太平	周も亦た太平を致す。」
在昔懐帝京	在昔 帝京を懐ふに、
日昃不敢寧	日の昃くまで敢へて寧んぜず。
濟濟在公朝	濟濟たるは公朝に在り、
万載馳其名	万載 其の名を馳す。」

太極（万物の根源）が陰陽を定め、天地が始めてかたちを現した。三光（日・月・星）は八方の最果ての地までも照らし、天の道はくっきりと明らかとなった。」

天は民たちのために君主を立て、それによって民たちの生活を全うさせようとする。君主が仁政を行うならば、天は瑞祥を示してその善を顕彰し、天変地異は、君主の驕慢を戒めるためのものである。」

天の神は高い位置にありながら、下々の人間たちの声に耳を傾け、それに応報するさまは、まるで響きが声に応じるかのようだ。聡明なる君主は、微賤の者たちに敬意をもって接するものだが、夏殷周三代の末世の王（桀・紂・幽）は、この天の常道に暗かった。」

二人の伝説的帝王（伏羲・神農）は、その素晴らしい教化が称賛され、なんと盛んであることか、堯や舜が治めた時代の朝廷は。禹や湯はその徳を受け継いで、周王朝もまた太平の世をもたらした。」

その昔、帝都の有り様を懐かしく思い起こせば、今は亡き先代は、日の傾くまで敢えて休息もせず、人材登用に努めた。その結果、立派な人士たちが威厳をもって公朝に居並び、永遠にその名声を馳せることになったのだ。」

四句ずつひとまとまりを為す本詩のうち、まず注目したいのは最後の第五段である。十八句目「日昃不敢寧」は、『書経』無逸篇に、周文王の事績について「自朝至于日中昃、不遑暇食、用咸和万民（朝より日の中昃に至るまで、食に遑暇あらず、用て咸く万民を和す）」とあるのを踏まえる。周文王に関する同様の記事が、『史記』周本紀には「礼下賢者、日中不暇食以待士。士以此多帰之（礼もて賢者に下り、日の中するまで食に暇あらずして以て士を待す。士は此を以て多く之に帰す）」と記されていることから、周文王が食事をも忘れて取り組んだのは、礼を尽くして賢人を招くという仕事であったと知られる。続く第十九句「濟濟在公朝」の「濟濟」は、『詩経』大雅「文王」にいう「濟濟多士、文王以寧（濟濟たる多士、文王は以て寧らかなり）」を響かせたものであり、この語を含むこの一句は、公朝に居並んだ臣下たちの威儀あるさまを描写したものである。そして、ここに立派な人士たちが大勢集まっているのは、前掲『史記』に見たとおり、周文王が賢者を手厚く待遇したからに他ならない。そうしてみると、第十八句にいう「不敢寧」は、『詩経』にいう「文王以寧」を用いつつ反転させて、文王が現状に安住することなく、人材登用に尽力し続けたことを言うものだろう。

この第五段における周文王への集中的言及は、その直前の第十六句「周亦致太平」から自然に導き出されたものであることは間違いない。だが、それと同時に想起されるのは、魏の事実上の創始者である武帝曹操のことである。彼は、才能第一主義を掲げて、広域から多くの人材を集めた。そして、後漢の献帝を擁して天下に号令を下しながら、終生、後漢王朝の臣下という立場を堅守し続けた。この姿勢は、『論語』泰伯篇に「三分天下有其二、以服事殷（天下を三分して其の二を有し、以て殷に服事す）」と称された周文王に重なるものである。曹操自身もこのことを強く意識して、建安十五年（210）に発布した「述志令」（『魏志』武帝紀の裴松之注に引く『魏武故事』）の中で、『論語』のこの部分を引用しながら、後漢王朝における自身の立ち位置を表明している。また、曹操は自作の楽府詩「短歌行・周西」（『宋書』樂志三）の冒頭でも、西伯昌すなわち周文王のこの事績を歌い上げている。更に、その最晩年に当たる建安二十四年（219）には、天意に従って天下掌握を勧める古馴染みの忠臣夏侯惇に対して、「若天命在吾、吾為周文王矣（若し天命の吾に在らば、吾は周文王為らん）」と答えている（『魏志』武帝紀裴注に引く『魏氏春秋』）。曹操自身のこうした言動に対して、その子曹植もまた、深い敬意とともにこれを賛美している。その端的な例として、亡き父曹操を哀悼する「武帝誄」（『曹集詮評』巻10）に、「虔奉本朝、徳美周文（虔にして本朝を奉じ、徳の美なること周文のごとし）」とあるのが挙げられ

よう。こうしてみると、曹植はこの第五段において、周文王を詠じながら、そこに父曹操を重ねていたと見てよいだろう。

思えば、周王朝と曹魏王朝とはその世系がよく重なり合う。前述のとおり、魏王に封ぜられながら、最後まで後漢王朝の臣下という立場を貫いた曹操は、広大な領土を保有しながらも殷に仕え続けた周文王に重なる。曹操の後を継いで魏王となり、次いで後漢王朝の禪譲を受けて魏の初代皇帝となった文帝曹丕は、周王朝を建てた武王に重なり、更に、文帝曹丕の死後、二十二歳で即位した二代目皇帝の明帝曹叡は、武王の後を継いだ幼主成王に重なりあう。すると、世系上、曹操の子にして、曹丕の弟、曹叡の叔父である曹植は、周文王の子にして、武王の弟、成王の叔父である周公旦と、その系譜上に占める位置が一致する。

「惟漢行」を作る上で、曹植はこのことを強く意識していたのではないか。というのは、本詩第十八句「日昃不敢寧」が踏まえる前掲の『書経』無逸篇は、その本文に明記されているとおり、周公旦が、幼くして即位した成王の安逸を論ずる目的で著したものである。曹植詩のこの部分は、ただ単に『書経』を援用して、周文王に重なる曹操の徳を顕彰しているばかりではない。それ以上に注目すべきは、その典拠である無逸篇が、周公旦によって書かれたものだという点である。つまり、『書経』のこの記述を踏襲するということは、この無逸篇を著した周公旦に、今この楽府詩を詠じている自身が重なりあうということである。曹植は、このことを自覚しつつ、かの周公旦がそうしたように、王朝の始祖である曹操の事績を示しつつ、自らの甥である新帝に、為政者として取るべき正道を指し示そうとしたのではあるまいか。

こうした観点から本詩全体を見渡してみると、若い皇帝に帝王学を説いて聞かせたと解釈できる部分が散見することに気づかされる。たとえば第五・六句「為人立君長，欲以遂其生」は、『春秋左氏伝』襄公十四年にいう「天生民而立之君，使司牧之，勿使失性（天は民を生じて之が君を立て、之を司牧せしめて、性を失はしむる勿し）」を踏まえ、天子たる者の存在意義は、民の生活を全うさせることにあるのだと説いている。また、第九・十句「神高而聴卑，報若響応声」は、『淮南子』道応訓に見える次のような記事——すなわち、宋の景公は、火星が宋の分野を侵食しようとしていることを恐れ、天文を司る子韋に対応策を問うたところ、その災いを、自身から宰相、人民、農作物の収穫へと振り向けるよう提案される。そして、これらの三つの提案をすべて退けた景公は、子韋から「天之处高而聴卑。君有君人之言三，天必有三賞君（天は之れ高きに処りて卑きに聴く。君に人に君たるの言有ること三たびなれば、天は必ず三たび君を賞する有らん）」との慶賀を受けた、という故事を踏まえている。曹植は、この記事から特に「処高而聴卑」というフレーズを取り上げて詩にはめ込み、この故事を踏まえることを明示しつつ、為政者たる者の心構えを説いている。

このように見てくると、曹植における「惟漢行」制作の意図は、次のように捉えることができるだろう。すなわち、曹植は本詩において、自身を魏朝における周公旦のような存在と位置付け、自らの甥に当たる若き新帝に対して、我らが父祖、武帝曹操の生前の仕事ぶりに言及しつつ、皇帝たる者のあるべき姿を指し示そうとしたのである、と。

曹植の「惟漢行」は、明帝曹叡を輔佐しようという思いから作られたと推測される。では、その成立時期は明帝期（226-239）のいつ頃だろうか。この問いに対する答えは、第八句「变故誠驕盈」が示唆している。この詩句に符合するような出来事が、ちょうど明帝が即位して間もない頃、まさしく現実に起こっているのである。『魏志』楊阜伝に、次のような記事が見えている。

頃者天雨，又多卒暴雷電非常，至殺鳥雀。天地神明，以王者為子也。政有不当，則見災譴。

克己内訟，聖人所記。惟陛下慮患無形之外，慎萌纖微之初……（頃者天雨ふり，又た卒暴なる雷電の常に非ざること多くして，鳥雀を殺すに至る。天地神明は，王者を以て子と為すなり。政に不当なる有らば，則ち災譴見はる。己に克ち内に訟むるは，聖人の記す所なり。惟れ陛下には患ひを無形の外に慮り，萌を纖微の初めに慎まれんことを……）。

ここに抄出したのは，楊阜による明帝への上書文の一部である。これによると，当時，大雨と頻発する雷電のため，多くの鳥雀が死滅するという異変が起こったらしい。そこで，これを重く見た楊阜が明帝に上書して，天地神明は為政者を我が子とみなし，治政に不適切なことがあれば天災を下して譴責するのだから，自然界が示す戒めをよく受けとめて気持ちを引き締めるようにと，その放恣を諫めたのである。

では，この楊阜の上書は明帝期のいつ為されたのか。それは，『宋書』五行志一，恒雨の条に記された次の記事により，太和元年（227）の秋であったことが知られる。

魏明帝太和元年秋，数大雨，多暴雷電，非常，至殺鳥雀。案楊阜上疏，此恒雨之罰也。時帝居喪不哀，出入弋獵無度，奢侈繁興，奪民農時。故木失其性而恒雨為災也（魏の明帝の太和元年の秋，数大いに雨ふり，暴なる雷電多きこと，常に非ず，鳥雀を殺すに至る。案ずるに楊阜が上疏せるは，此の恒雨の罰なり。時に帝は喪に居るも哀せず，弋獵に出入して度無く，奢侈繁興して，民の農時を奪ふ。故に木は其の性を失ひて恒雨の災ひを為すなり）。

天変地異は人間界に対する天からの戒めだとする，いわゆる天人相関説は古来あるものであって，ここに記されたような出来事それ自体は決して珍しいものではない。だが，この異常気象と，楊阜を上書に駆り立てた明帝の放縦な振る舞いとは，当時としてもよほど突出した出来事だったのである。だからこそ，『宋書』五行志にもこのように記録されたに違いない。曹植「惟漢行」にいう「變故誠驕盈」がもしこの天変を念頭に置いていたのだとするならば，本詩の成立は，それが起こった太和元年の秋からさほど離れていない時期だということになるだろう⁽⁴⁾。それは，明帝が即位した黄初七年（226）五月十七日（『魏志』明帝紀）から，一年余り後の時点に当たっている。なお，『宋書』五行志五，日蝕の条には，「魏明帝太和初」のこととして，太史令許芝による日蝕の予見と，明帝が天人相関説に基づいて自らを譴責し，「群公卿士，其各勉修厥職。有可以補朕不逮者，各封上之（群公卿士よ，其れ各勉めて厥の職を修めよ。以て朕が逮ばざるを補ふ可き者有らば，各之を封じ上せよ）」と，官人たちに諫言を募る詔が記されている⁽⁵⁾。前述の楊阜の上書や曹植の「惟漢行」は，この詔に應えるものであった可能性もある。

二 明帝期初めにおける曹植の動向

前章での検討により，曹植「惟漢行」は，明帝が即位して間もない時期，魏王朝における自身の役割を周公旦に当たるものと自任した作者が，甥の新帝を戒める目的で作った樂府詩であると推定された。この推論を裏付ける確かな証拠は残されていない。だが，この時期の曹植の動向を探ることにより，上記の仮説の妥当性は，ある程度まで間接的に示すことができるように思う。『魏志』陳思王植伝に，次のような記載が見えている。

太和元年，徙封浚儀。二年，復還雍丘。植常自憤怨，抱利器而無所施，上疏求自試曰，……（太和元年，封を浚儀に徙さる。二年，復た雍丘に還る。植は常に自ら利器を抱くも施す所無きを憤怨し，上疏して自ら試みられんことを求めて曰く，……）

これによると，「惟漢行」制作の時期に相前後する太和元年（227），曹植は封土を一時的に浚儀

に移され、翌年、再び雍丘に戻されている。そして、この記事に続けて、彼は常に、優れた才能を持ちながらそれを発揮する機会が与えられないことに憤懣を抱き、自らの能力を試して欲しいと上疏したことが、その本文とともに記されている。

本伝に引用された上疏文（『文選』巻37にも「求自試表」として収載）には、手厚い待遇を受けながら、国家のために何の貢献もできない自身の境遇に対して、強い焦燥感を感じていることが繰り返し述べられている。その一端として、先にも触れた周公旦に言及する部分を挙げてみよう。

昔二虢不辭兩國之任，其德厚也。且夷不讓燕魯之封，其功大也。……今臣無德可述，無功可紀，若此終年無益國朝，將挂風人彼其之譏（昔 二虢の兩國の任を辞せざるは、其の徳 厚ければなり、且・夷の燕・魯の封を譲らざるは、其の功 大なればなり。……今 臣には徳の述べ可き無く、功の紀す可き無く、此の若くして年を終へ國朝に益無くんば、將に風人の「彼其」の譏りに挂らんとす）。

このように曹植は、周文王の弟である虢仲と虢叔、周文王の子であり武王の弟である周公旦と召公奭を引き合いに出しながら、何の徳も功績もないのに厚遇されている自身を、『詩経』曹風「侯人」の批判に当たる者だと断罪している⁶⁾。

更に、『魏志』本伝の前掲部分に対して、裴松之注は『魏略』の次のような記事を引いている。植雖上此表，猶疑不見用，故曰、「夫人貴生者，非貴其養体好服，終竟年寿也。貴在其代天而理物也。夫爵禄者，非虚張者也。有功德然後応之，当矣。無功而爵厚，無徳而禄重，或人以為榮，而壯夫以為恥。故太上立德，其次立功。蓋功德者所以垂名也。名者不滅，士之所利。故孔子有夕死之論，孟軻有棄生之義。彼一聖一賢，豈不願久生哉。志或不展也。是用喟然求試，必立功也。嗚呼，言之未用，欲使後之君子知吾意者也」（植は此の表を上ると雖も、猶ほ用ひられざらんことを疑ひ、故に曰く、「夫れ人の生を貴ぶは、其の体を養ひ服を好みて、年寿を終竟するを貴ぶに非ざるなり。貴きは其の天に代はりて物を理むるに在るなり。夫れ爵禄なる者は、虚しく張る者に非ざるなり。功德有りて然る後に之に應ずるは、当たれり。功無くして爵厚く、徳無くして禄重きは、或る人は以て榮と為すも、而して壯夫は以て恥と為す。故に太上は徳を立て、其の次は功を立つ。蓋し功德は名を垂るる所以なり。名は滅せず、士の利する所なり。故に孔子に夕べに死するの論有り、孟軻に生を棄つるの義有り。彼は一聖一賢なるも、豈に久生を願はざらんや。志に或いは展びざること有るならん。是を用て喟然として試みられんことを求め、必ずや功を立てんとせるなり。嗚呼、言の未だ用ひられず、後の君子をして吾が意を知らしめんと欲する者なり」と）。

曹植は、この上表文を奉っても用いられないのではないかと疑念を抱き、ゆえにこう述べた。

「そもそも人が生を尊ぶのは、その肉体を養い、見た目を飾って、天寿を全うするためではない。天に代わって世の中を治めるところに、その尊さがあるのだ。そもそも爵位や禄高などというものは、見栄を張るためのものではない。功績や人徳があつて、これに爵禄がついてくるのは当然であるが、功績がないのに爵位を手厚くされ、人徳もないのに豊かな俸禄が与えられるのは、ある人は榮えあることと思うかもしれないが、一人前の男子は恥とするところだ。だから、最上は徳を立てること、その次は功績を上げることなのである。思うに、功や徳はそれによって後世に名を残すことができるものだ。名の不滅は、男子の重視するところだ。だから、孔子に「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」（『論語』里仁篇）の議論があり、孟軻に、生か義か二者択一を迫られれば、自分は「生

を捨てて義を取る者なり」(『孟子』告子章句上)の主張があるのだ。彼らは一人は聖人、一人は賢者であるが、長生きを願わなかったはずはない。もしかしたら、志を伸び伸びと実現できない憾みを抱えていたからこそその発言だったのではあるまいか。このようなわけで、私は深い歎息とともに自身を試して欲しいと上訴し、任用されれば必ず功績を上げると約束したのである。ああ、言葉が用いられないなら、後世の君子に私の思いを知ってほしいと願うものである。」

ここに表出されているのも、先に触れた「求自試表」と同様、その手厚い爵禄に見合う働きを為し、功績を打ち立てたいという彼の切実な願いである。

さて、曹植「惟漢行」の成立時期は、太和元年の秋からそれほど下らない時期だろうと先に推定した。もしこの推定が妥当だとするならば、それは、彼の「求自試表」やそれに続く前掲の文章が書かれた時期の直前に当たっている。先の『魏志』陳思王植伝に見たとおり、太和二年の曹植は、常に「利器を抱くも施す所無し」という憤懣を抱いており、それが同年秋の「求自試表」執筆⁽⁷⁾へとつながった。この一連の流れの出発点に、明帝への戒めを詠じた「惟漢行」があったとは考えられないだろうか。

曹植のこの楽府詩は、彼の意思とは裏腹に、魏王朝に受け入れられることはなかったと思われる。そう推測する理由の第一は、曹植には皇帝を諫める資格無しと王朝に見なされていただろうということである。明帝の父であり、曹植の兄である文帝曹丕の黄初二年(221)、曹植はその不埒な言動を監国謁者の灌均に告発されて処罰され、その後も重ねて罪せられ、その名誉回復は、彼の死後、明帝の最晩年に当たる景初年間(237-239)まで待たねばならなかった(『魏志』陳思王植伝)。そうした罪人に、皇帝への諫言が許されるはずもない。

また、別の理由として、曹植の「惟漢行」は、曹操の「薤露」に基づくという点で非難された可能性があるということである。まず、曹操の「薤露・惟漢二十二世」は、古歌曲「薤露」に基づく。この「薤露」は、先秦時代から伝わる挽歌であり、元来は別の挽歌「蒿里」とともに一つの歌曲として歌われていたものが、前漢王朝の協律都尉李延年によって二つに分けられ、「薤露」は王侯貴人を送る歌、「蒿里」は士大夫庶人を送る歌としてその役割を分担することとなった⁽⁸⁾。曹操はこのことを踏まえ、自作の新歌辞「薤露」では、滅びゆく漢王朝を哀悼し、「蒿里」では、漢末の群雄たちの自滅と、動乱の中で命を落とした兵士や庶民たちを弔った。そして、曹操の新歌辞による「薤露」「蒿里」は、ともに魏王朝の宮廷歌曲群「相和」に組み入れられている。曹植「惟漢行」の楽府題は、曹操のこの「薤露・惟漢二十二世」に由来することを明示しているが、内容としては、曹植の本詩中に、曹操「薤露」に詠われたような王朝の滅亡を弔う要素は認められない。それでも、もし仮にこの詩歌の存在が宮中にまで知られた場合、若き新皇帝が即位したばかりの魏王朝にとって、不吉極まりないものと決めつけられ、咎められたらろうことは容易に想像される。

また、曹操「薤露・惟漢二十二世」は、前述のとおり、魏王朝の宮廷歌曲「相和」十七曲を構成する一歌辞である。「相和」歌辞は、その他の楽府詩とは異なって、基本的に一つの楽曲に対して一つの歌辞が存在するのみ、しかも、その歌辞の作者は、武帝曹操か文帝曹丕、あるいは非常に古い来歴を持つ詠み人知らずの楽府詩、古楽府に限られる⁽⁹⁾。魏王朝において、このように特別な位置を占める歌曲群の中の一曲、しかも王朝の創始者である武帝曹操の歌辞による「薤露・惟漢二十二世」に、曹植は自作の新歌辞をかぶせるという行為に出た。これは、不敬罪にも相当する所業として受けとめられたのではなからうか。現に、このような創作活動は、同時代の

他の文人には認められない。もちろん、曹植には大それた反逆心などあったはずもない。何よりも彼にとって曹操は、敬愛してやまない自身の父である。だが、王朝から見れば、曹植は諸王の一人にすぎない。曹植の「惟漢行」は、魏王朝から体よく無視されるか、あるいはそれが再び処罰の対象となった可能性すらある。前掲の『魏志』陳思王植伝に、太和元年のこととして、一時的に封土を浚儀に移され、翌年に再び雍丘に戻されたことが記されていたが、この唐突な異動は、もしかしたら「惟漢行」制作という行為に起因する処分であった可能性も否定できない。

以上、明帝期の太和元年から二年における曹植の動向を押さえ、この時期の彼の鬱屈が、「惟漢行」制作に端を発するかもしれないと推測し得る理由を示した。この楽府詩は、自らを周公旦と位置付けた曹植が、新たに即位した明帝に、為政者たる者の心構えを説くという趣旨の作品であったが、その作者の意図とは裏腹に、本詩が魏王朝に受け入れられることはなかった。そればかりか、先の文帝期に咎められた失態に続く新たな罪状となる可能性すらあった。にも拘わらず、そうしたリスクを知ってか知らずか、曹植は「惟漢行」という作品を作った。そして、これに起因する挫折と焦燥感が、「求自試表」以下、明帝期に目立つ、曹魏王朝への度重なる建議に彼を駆り立てていった。このように推し測ることも、あるいは許されるのではないだろうか。

三 曹植「薤露行」の主題とその成立背景

曹植の「惟漢行」は、新しく即位した明帝を戒める趣旨で作られたものであって、その楽府題のもととなった曹操「薤露・惟漢二十二世」の内容を踏襲してはいない。ならば、その独自の内容を、「薤露」ではない、別の楽府題に乗せて詠じてよかったはずである。それなのに、彼は敢えて曹操の「薤露」歌辞を継承する立場を標榜した。なぜだろうか。この問題を考える上で、有力な示唆を与えてくれるのが、同じ曹操の「薤露」に連なる、曹植の別の楽府詩「薤露行」である。まず、その本文を、通釈とともに提示しよう。

天地無窮極	天地 窮極無く、
陰陽転相因	陰陽 転じて相因る。
人居一世間	人 一世の間に居ること、
忽若風吹塵	忽として風の塵を吹くが若し。」
願得展功勤	願はくは功勤を展ぶるを得て、
輸力於明君	力を明君に輸さんことを。
懷此王佐才	此の王佐の才を懐き、
慷慨独不群	慷慨して独り群れず。」
鱗介尊神龍	鱗介は神龍を尊び、
走獸宗麒麟	走獸は麒麟を宗とす。
虫獸豈知徳	虫獸すら豈れ徳を知る、
何況於士人	何ぞ況んや士人に於いてをや。」
孔氏刪詩書	孔氏 詩書を刪して、
王業粲已分	王業 粲として已に分らかなり。
騁我徑寸翰	我が徑寸の翰を騁せ、
流藻垂華芬	藻を流して華芬を垂れん。」

天地は永遠に尽きることなく存在し、陰陽は連なりあって交替を繰り返す。人は一世の間

に身を置いて、その忽然と終わりを迎えるさまは、風に吹かれる塵のようだ。」

だからこそ、存分に励んで功績を上げ、力の限り明君にお仕えしたいと願う。王を補佐するにふさわしいこの才能を抱き、高ぶる感慨を胸に、ひとり群れから抜きんでる。」

江海に棲むものたちは神なる龍を尊崇し、山野を駆ける獣たちは麒麟を宗主として仰ぐものだという。爬虫や獣ですら徳あるものを知っているのだから、まして学のある人間においてはおさらだろう。」

孔子が『詩経』や『書経』を刪定して、帝王の事業はすでに燦然と明らかである（孔安国「尚書序」）。わが直径一寸ばかりの筆を思うがままに走らせて、美しい言葉を後世に伝え、輝かしい名声を永遠に響かせたいものだ。」

見てのとおり、この楽府詩が詠じているのは、全力で明君に仕えたいという意欲と、自身の「王佐才」に対する自負心、そして、帝王の事績を記す不朽の書物を著して、後世に名を残したいという志である。本作品も、先に見た「惟漢行」と同じく、漢王朝を追悼する曹操「薤露」のような、葬送歌としての要素は持っていない。

ところが、主題がそれほどかけ離れているにも拘らず、両歌辞の題名は「薤露」という語を共有しており、しかもその詩の句数も一致している。ということは、曹操の楽府詩も曹植のそれも、内容はともかく、メロディは同じ「薤露」に乗るものであったということの意味するだろう。このことを手掛かりに、何が導き出せるだろうか。結論から言えば、曹植「薤露行」は、曹操が主催する魏王国での宴席で、父であり主君である曹操を前にして、その志を伸び伸びと詠じてみせたものだといえることができる。その根拠を以下に示していこう。

まず注目したいのは、第三・四句「人居一世間、忽若風吹塵」である。この句は、「古詩十九首」其四（『文選』巻29）にいう「人生寄一世、奄忽若飄塵（人生 一世に寄るや、奄忽たること飄塵の若し）」を明らかに踏まえている。そして、この古詩は、その冒頭に「今日良宴会、歡樂難具陳（今日 良き宴会、歡樂 具には陳べ難し）」とあるように、宴席を舞台に誕生した作品だと見られる。そうした古詩の辞句を用いているということは、本詩もまた同質の場で作られた可能性が高いと言えるだろう。

この推測を補強するのが、本詩の第一句「天地無窮極」である。この句とほとんど同一の辞句が、曹植本人の「送応氏詩二首」其二（『文選』巻20）に、「天地無終極、人命若朝霜（天地には終極無きも、人命は朝霜の若し）」と見えている。この「送応氏詩」は、その冒頭に「清時難屢得、嘉会不可常（清時 屢は得ること難く、嘉会 常にす可からず）」というように、別れの宴で作られたものと判断できる。そうした詩とほぼ同一の句を共有しているということは、曹植「薤露行」を宴席で作られた楽府詩だと見る推測の証左となるだろう。

加えて、そもそも楽府詩は、民間歌謡に出自を持つとはいえ、後漢時代には既に上流階級の宴席で盛んに行われていた文芸である¹⁰⁰。そして、元来が挽歌であった「薤露」も、同じ頃、同様な場で歌われるようになっていた。たとえば、『後漢書』周挙伝に、順帝の永和六年（141）三月上巳節（三日）、外戚の梁商が催した宴席について、「商大会賓客、譙于洛水。挙時称疾不往。商与親暱酣飲極飲、及酒闌倡罷、繼以薤露之歌。坐中間者、皆為掩涕（商は大いに賓客を会し、洛水に譙す。挙は時に疾と称して往かず。商は親暱と酣飲して飲を極め、酒闌にして倡罷むに及びては、繼ぐに薤（薤）露の歌を以てす。坐中の聞く者は、皆為に涕を掩ふ）」との記述が見えている。曹操はこうしたことをすべて視野に入れた上で、滅びゆく後漢王朝を哀悼する新歌辞「薤露・惟漢二十二世」を作り、魏王国の宴席に集った大勢の人々の面前でこれを披露したのである

う。そして、この曹操による新歌辞が、魏王朝成立後の宮廷歌曲群「相和」十七曲に組み入れられ、宮中で歌われたのである。

以上を要するに、曹植の「薤露行」は、曹操「薤露」と同様に、宴席という場で作られ、歌われたと見るのが妥当である。では、曹植の本詩制作は、具体的にいつ頃、どのような場面においてだったのだろうか。この問題に関して、古直の次の指摘¹¹⁾は示唆に富む。

案、子建「与楊徳祖書」云「吾雖徳薄，位為藩侯，猶庶幾勦力上国，流恵下民，建永世之業，留金石之功」，即此詩上半之意也。又曰「若吾志未果，吾道不行，則將采庶官之実録，辨時俗之得失，定仁義之衷，成一家之言。雖未能蔵之於名山，將以伝之同好」，即此詩下半之意也（案ずるに、子建が「楊徳祖に与ふる書」に云ふ「吾は徳薄しと雖も、位は藩侯為り、猶ほ庶幾はくは力を上国に勦せ、恵みを下民に流し、永世の業を建て、金石の功を留めんことを」は、即ち此の詩（「薤露行」）の上半の意なり。又た曰く「若し吾が志の未だ果されず、吾が道の行はれずんば、則ち將に庶官の实録を采り、時俗の得失を辨じて、仁義の衷を定め、一家の言を成さん。未だ之を名山に蔵すること能はずと雖も、將に以て之を同好に伝へんとす」は、即ち此の詩の下半の意なり）。

楊修（字は徳祖）は、曹植の才能を高く評価した人物だが、建安二十四年（219）、曹操に罪を得て亡くなった。すると、曹植が彼に宛てた書簡「与楊徳祖書」はそれ以前に成ったものであり、それと内容面で深く重なり合う「薤露行」も、これとほぼ同時期、建安年間の作だと推定し得る。

また、先に指摘したとおり、「薤露行」の第一句は、曹植「送応氏詩」とほぼ同じ句が共有されている。これほどまでに似た辞句は、それが生まれた年代の近さを物語っているかもしれない。先ごろ作った詩句が、思わず再び口をついて出てきたということではなかったか。もしこうした推量妥当であるならば、この点からも、曹植の「薤露行」は建安年間の作だと推定し得る。応瑒は建安二十二年（217）に没しているからである。

更に、前章で提示した太和二年の曹植の文章（『魏志』陳思王植伝裴注に引く『魏略』）を想起されたい。その中に「故太上立德，其次立功。蓋功德者所以垂名也。名者不滅，士之所利」とあった。これは、『春秋左氏伝』襄公二十四年に、「死而不朽」について記されている「大上有立德，其次有立功，其次有立言（大上には徳を立つる有り，其の次には功を立つる有り，其の次には言を立つる有り）」を踏まえた表現である。ところが、この三つの「不朽」のうち、曹植は前掲の文章で「立言」を落としていた。つまり、明帝期初めの曹植は、言語表現によって後世に名を残したいという願望を失っていたと見ることができるだろう。この時期の彼にとって、王朝の一員として功績を上げることの方がはるかに価値のあることだったのである。このことは、前述の「求自試表」に続いて、「求通親親表」「陳審拳表」（いずれも『魏志』陳思王植伝に収載）等、王朝運営に関わる提言を彼が次々に行っていることから十分に窺われよう。では、ひるがえって「薤露行」はどうか。そこには、著述という営為によって後世に名を残したいという志が明瞭に詠じられている。ということは、少なくともこの楽府詩は明帝期のものではない。そして、常にその言動が監国謁者らによって見張られていた文帝期のものでもないだろう。

こうしてみると、曹植の「薤露行」は、曹操が存命していた建安年間の作と見るのが妥当である。そして、ここで再び想起されたいのは、曹植の「薤露行」が、曹操の「薤露・惟漢二十二世」と同じ句数を持つということである。句数が同じということは、その歌辞が流れる時間が同じだということであり、それはつまり実際に同じ楽曲に乗るということを意味する。加えて、曹植の「薤露行」は、上述のとおり、宴席で詠われた楽府詩だと推定されるのであった。こうしてみる

と、曹植の「薤露行」は、魏王国で催される宴席で、曹操の「薤露・惟漢二十二世」が歌われるような機会に、同じ「薤露」のメロディに乗せて、自らの父であり、主君でもある眼前の魏王曹操に向けて、その若々しい抱負を存分に詠じてみせたものであるとの推定は十分に成り立つと言えよう。

四 結語

曹植は、その卓越した文学的才能や虚飾のないざっくばらんな性格により、かつて父曹操の愛情を一身に集めていた。曹操は、曹植の才能や人柄を愛したのみならず、天下の大事を決し得る人物としても将来を囑望していたという（『魏志』陳思王植伝裴注に引く『魏武故事』）。ところが、曹植はしばしば父の愛情や期待を裏切る行為に出ている。たとえば、建安二十二年（217）二十六歳の頃、車に乗って君主専用道路を通り、司馬門を勝手に開けさせて宮殿の外に出たり（『魏志』本伝及び同裴注に引く『魏武故事』）、同二十四年（219）、関羽に包囲された曹仁の救援に赴くよう命ぜられながら、それに応じることができなかつたり（『魏志』本伝）。後に、兄の曹丕が後漢王朝からの禪讓を受けて魏の文帝として即位した時（220）、曹植は自身の不甲斐なさと父の失望に思いを致し、痛恨のあまり声を上げて泣いたという（『魏志』蘇則伝裴注に引く『魏略』）。

そんな曹植は、文帝曹丕の時代を鬱屈の中で過ごした後、甥の明帝曹叡が即位するに至って何を思っただろうか。このとき、にわかにリアリティを以て迫ってきたのが、前述の周公旦という歴史上の人物だったのではないかと筆者は考える。彼は、自身をこの古人になぞらえ、若き新帝の補佐役として生きようと思い立った。魏王朝において周公旦のごとき役割を果たすことは、かつて自身に期待を寄せてくれた父の恩愛に報いることであり、また、かつて父の期待を裏切り続けてきた自身の生き直しでもあったはずである。かくして作られたのが、我らが父祖曹操の偉業に触れつつ、明帝を戒めようとする「惟漢行」であった。

このように見てくると、本詩の内容が、「惟漢行」という楽府題で詠じられなければならなかった理由は自ずから明らかであろう。思い起こされたいのは、若かりし曹植が、父曹操の「薤露・惟漢二十二世」に唱和するように「薤露行」を作っていたことである。その内容は、持てる才能を存分に発揮して、明君に仕えようとする志を歌い上げるものであった。あの時、「薤露行」の中で詠じた思いが、数年間の雌伏の時を経て練り直され、姿を変えて今ふたたび立ち現れた。魏王室の一員として明帝を補佐したいという抱負を詠ずる「惟漢行」は、それゆえ、かつて曹操の前で詠じた「薤露行」の続編でなければならなかったのである。

注

- (1) 落合悠紀「曹魏明帝による宗室重視政策の実態」（『東方学』第126輯、2013年7月）、津田資久「『魏志』の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識」（『東洋学報』第84巻第4号、2003年3月）を参照。
- (2) 曹植作品の引用は、丁晏纂・葉菊生校訂『曹集詮評』（文学古籍刊行社、1957年）を底本とする。本稿で中心的に取り上げる「惟漢行」「薤露行」は、同書巻5所収。
- (3) 通釈に当たっては、古直『曹子建詩箋』（広文書局、1976年第3版）、黄節註・葉菊生校訂『曹子建詩註』（中華書局、1976年重印）、趙幼文『曹植集校注』（人民文学出版社、1984年）、曹

海東注訳・蕭麗華校閲『新訳曹子建集』（三民書局，2003年），王巍『曹植集校注』（河北教育出版社，2013年）を参照した。

- (4) 曹海東前掲書（注3）第240頁を参照。
- (5) 趙幼文前掲書（注3）第365頁に指摘する。
- (6) 『毛詩』曹風「候人」に「彼其之子，不称其服（彼其の之の子，其の服に称はず）」、鄭箋に「不称者，言德薄而服尊（称はずとは，徳の薄くして服の尊きを言ふ）」と。陳寿祺撰・陳喬樞述『三家詩遺説考』韓詩遺説攷（考）六（王先謙編『清經解統編』卷1155所収）によると、『毛詩』本文の「其」字を、『韓詩』は「己」に作っている。『文選』卷37所収の曹植「求自試表」は、『韓詩』に拠って「己」に作る。
- (7) 「求自試表」の制作は，太和二年（228）秋九月の曹休の敗戦，及びその翌月の「詔公卿近臣拳良将各一人」（『魏志』明帝期）に触発されたものと判断される。趙幼文前掲書（注3）第379頁を参照。
- (8) 晋の崔豹『古今注』（『文選』卷28，陸機「挽歌詩三首其一」の李善注に引く）に，「薤露蒿里，並喪歌。出田横門人。横自殺，門人傷之，為之悲歌。言人命如薤上之露易晞滅。亦謂人死魂精歸乎蒿里。故有二章，其一曰，薤上朝露何易晞，露晞明朝更復落，人死一去何時歸。其二章曰，蒿里誰家地，聚斂魂魄無賢愚，鬼伯一何相催促，人命不得少踟躕。至李延年乃分二章為二曲。薤露送王公貴人，蒿里送士大夫庶人。使挽柩者歌之，世亦呼為挽歌也（薤露・蒿里は，並びに喪歌なり。田横の門人に出づ。横 自殺し，門人 之を傷み，之が為に悲歌す。人命は薤上の露の如く晞滅し易きを言ふ。亦た人死すれば魂精は蒿里に帰らんことを謂ふ。故より二章有り，其の一に曰く，薤上の朝露 何ぞ晞き易き，露は晞けば明朝更に復た落つるも，人死して一たび去らば何れの時にか帰らん，と。其の二章に曰く，蒿里は誰が家の地ならん，魂魄を聚斂して賢愚無し，鬼伯の一に何ぞ相催促する，人命は少しくも踟躕するを得ず，と。李延年に至りて乃ち二章を分かちて二曲と為す。薤露は王公・貴人を送り，蒿里は士大夫・庶人を送る。柩を挽く者をして之を歌はしむれば，世に亦た呼びて挽歌と為すなり）」とある。
- (9) 柳川順子「魏朝における「相和」「清商三調」の違いについて」（『九州中国学会報』第41巻，2003年。『漢代五言詩歌史の研究』（創文社，2013年）に収載）を参照されたい。
- (10) 王運熙「漢代的俗樂和民歌」（『樂府詩述論』上海古籍出版社，1996年。初出は『復旦學報』1955年第2期），小西昇「後漢に於ける樂府詩流行の状況について」（『文学研究』第60輯，1961年。『漢代樂府・謝靈運詩論集』葦書房，1983年に収載）を参照。
- (11) 古直前掲書（注3）第3巻第5葉裏を参照。

*本稿は，令和3年度科学研究費助成事業・基盤研究(C)「中国中世初期における文学の質的転換に関わる研究」（課題番号19K00376）の成果の一部である。

外国語要旨

曹植《惟漢行》之创作动机

柳川 順子

如其乐府题所示，曹植的《惟漢行》是基于曹操的相和歌辞《薤露·惟漢二十二世》创作而成。附有曹操歌辞的《薤露》，是于魏王朝而言十分特别的宫廷歌曲群《相和》中的一曲，为其创作新歌辞是一个特例。然而，除此以外，曹植另有一首名为《薤露行》的乐府诗，同样与曹操的《薤露》相关联。那么，曹植为何要特意创作两次《薤露》的歌辞呢？本文通过揭示曹植《惟漢行》《薤露行》的主题和成立时期，以探明其为何必然是一首再次基于曹操《薤露·惟漢二十二世》而创作的乐府诗。

(翻译：刘 丽丹)